Ⅵ　研究の成果と今後の課題

１　成果

○　「目標」→「めあて」→「たしかめ」の一貫性をもって、言語活動の充実を図った指導を意識しながら実践に結びつけることができた。特に「たしかめ」の手立てを明確にし、具体的な合格ラインを設定したことは、見とどけを意識することにつながり、その後の児童への支援にもつながった。

○　「書くこと」に領域を絞り研究を進めたことで研究を焦点化でき、指導すべき内容を系統立てて考え、実践につなげることができた。

○　教材研究の時間を設定し研究を進めたことで、学年の指導事項を確実に押さえ、学年で検討を重ね、改善を図りつつ授業内容を深める事ができた。また、ワークシート等も改善を加えながら作成し、書くことを苦手としていた児童に「できる」「わかる」喜びや実感をもたせるこができた。

○　「たしかめ」における合格ラインを設定して授業に取り組み、毎時間の合格ラインに達した児童を把握すると１００%に近い児童がめあてを達成していた。また単元全体を通してもほとんど全員が目標を達成している。このように言語活動の充実を図った授業デザインを構築し、指導に生かしたことにより、ＣＲＴによる全国比が全ての学年で１００を上回った（本校の平均１０３）。

○　書く能力の全国比も各学年で向上し、本校の全学年の平均が全国比１０１となった。また「書くこと」の学習状況の評価で「よくできる◎・できる○」に達した児童が９３%に達するなど児童に基礎・基本の定着を図ることができた。

２　課題

●　授業で理解できた「書くこと」の内容を、確実に身につけ定着させるために日常の指導の充実を図らなければならない。

●　書くことの領域における「たしかめ」の合格ラインは、児童の生活体験や個人の能力の差が広がってくる高学年になると設定が難しくなる。また内容を深めるためにも個に応じて手立てが必要になる。

●　各学年で単元ごとに作成したワークシートやたしかめプリントのファイルや、学習コーナー、日記指導などの継続した取組が必要である。

主な参考文献・資料

○　小学校学習指導要領解説　国語編　文部科学省　（平成２０年８月）

○　豊かな言語活動を図る単元の構想　横浜市小学校国語教育研究会　著　東洋館出版　（平成２３年３月１０日）

○　新国語科の具現化　なぜ「言語活動の充実」なのか　小森　茂著　明治図書　（平成２３月５月）

○　言語活用力を高める説明文の指導　瀬川榮志　監修　金久慎一　編著　明治図書　（平成２２年１月）

○　実践国語研究№３０８　共同編集　須田　実・花田修一・小森　茂　明治図書　（平成２２年８／９月）

○　これだけは身につけたい　国語科基本用語　瀬川榮志　編著　明治図書　（平成１９年１０月）